

自己紹介から始めよう！：学術研究の独創性をもとめて

挽地，康彦

<https://doi.org/10.15017/7388827>

出版情報：大学院からはじめる社会学研究：問いを鍛える作法：三隅一人教授退職記念論集，pp. 148-156，2025-10-01．三隅一人教授退職記念論集刊行委員会
バージョン：
権利関係：



自己紹介から始めよう！ —学術研究の独創性をもとめて—

挽地 康彦

◎本章のねらい

あなたがどんな研究をするのであれ、研究に向き合う姿勢に対して配慮しておくべき事柄がいくつかある。この章では、具体的な研究内容の話というよりは、むしろ研究以前の段階で立ちはだかる障壁や直面しがちな困難の部分に焦点をあわせ、筆者の経験を踏まえた乗り越え方について紹介したい。

◎とくに読んでほしい人

大学院で研究を始めたばかりだが、すでに悩んでいる人。しかも、自分が何で悩んでいるのかも、よくわからなくなっている人。

1. 精神との闘い

大学院生として学術研究の世界により深く足を踏み入れることになったあなたは、いま大学院で日々を過ごししながら、大学時代とは明らかに異なる教育環境と社会関係に身を投じたことを実感しているであろう。自分で選んだ途とはいえ、大学時代の多くの同期たちが選択したキャリア形成の途から一人離れて、どこか迷宮に入り込んでしまったような感覚。しかも大学院への進学ともなれば、周囲の理解を得ることも容易ではないことが、この迷宮の構造をいっそう複雑にしているのかもしれない。

ライフ・プランニング（人生設計）の命題を十字架のように背負って生きなければならぬ現代では、人によっては、先が見えず、計算もできず、保障もない選択をしたかもしれないという後悔の念に駆られ、かといって後戻りすることもできないという不安に押し潰されそうになる。大学院では、しばしばそうした空気に包まれる。

もちろん、修士課程のみで身を引いたり、別の就職先を見つけて途中で大学院を後にしたりする人も少なくなく、大学院への進学時から計画的に「出口」を定めて動いている人や、

リスク管理の観点から早めにこの世界に見切りをつける人はいる。けれども、そうしたある種の「健康的」な理由ではなく、何の前触れもなく、いつの間にか大学院から姿を消す人がいることも、もう一方の事実である。院生生活が長くなり、若くして孤独に苛まれるのは、周囲からもたらされる悲しい情報や自信喪失によるところが大きい。

いずれにせよ、学術研究を志すうえで、このような「精神との闘い」——これには日本社会特有の教育環境や雇用文化が影響しているとも考えられるが——は（日本で学ぶ）院生であれば誰しもが経験することであり、研究の成果が上がるかどうかの以前に、しばしば到来する暗闇に対して自分で向き合い方を決めておかねばならない障壁となる。見方を変えれば、大学院進学がそれだけ特異なキャリアとして認識させられている「社会的事実」がこの日本社会には存在するということだ。

さて、このエッセイでは、読者として想定する層をあらかじめ示しておこうと思う。それは、将来に研究者になるべく大学院で研究をスタートさせ、そしてポスドクになっても自分は这个世界で生き延びようと考えている修士課程あたりの大学院生である。筆者である私は、その大学院生に向けて、自身の大学院時代を振り返りながら、時代が変わっても有効だと思われるアドバイスを自身の経験を踏まえて伝えることができればと思う。なぜ修士課程の院生かといえば、テコ入れできるのが修士課程あたりまでであり、博士課程になるとその院生の「型」（研究姿勢や研究方法など）がおおよそ固まってしまうと考えるからである。その型は善かれ悪しかれ、本人が後に研究者になったとしても、なかなか変えることはできない資質となる。

2. アイデンティティの所在のなさ

さて、「晴れて」かどうかはさておき、大学院生ともなれば、大学生までの時期と比べて何かと自己紹介をする場面が増えてくる。機会を活かせば、大学時代とは違った出会いがいっそう増え、人間関係が広がってくるからである。

そこでは、「大学生」という一括りの部分として自分を装うことから脱却して、他とは異なる一人の大学院生として自己を紹介しなければならなくなる。しかも、まだ駆け出しの修士課程の院生であっても、相手からは（敬意をこめて）「研究者」の一員として見なされることが多いゆえに、自分の研究テーマを説明することが自己紹介の代わりとなっていく。この大学時代との差異に由来する戸惑いが、実は院生としての最初の関門と言ってもよい試練となる。

社会学を学んでいた筆者は当時、九州大学大学院比較社会文化研究科に在籍していた。そこは学際性を謳う大学院であったため、哲学、文学、言語学、歴史学、人類学、政治学、法学、地域研究、生物学など人文・社会・自然科学の様々な分野で研究する大学院生たちが集っており、互いに切磋琢磨できる環境に恵まれていた。ただ、そうした多様性の場が、研究する者同士による知的な交流も盛んにしていたかといえば首をかしげるところがあった。専門分野における浅い知識に基づいたステレオタイプの言葉を並べてみても、自身の研究関心を理解してもらうことにはつながらず、研究の話ではなかなか会話が盛り上がらない…。会社員であれば名刺交換でさくっと済む自己紹介が、院生になった途端に研究テーマを提示しなければ成立しないものとなり、紹介できなければ院生としてロクに認知すらされない出会いとなってしまう。

これは本人がどこまで自覚しているかは別として、この自己紹介で感じる困難さや躓きの経験は院生としては結構重要である。なぜなら、研究テーマを相手にうまく説明できないということは、それだけ自身の問題設定が熟していないことを指し示しているからである。つまり、自己紹介の場面で戸惑うのは、自分では認識できていない問題関心の空白部分が顕在化している証なのである。だからこそ、繰り返される自己紹介の場面は、この点に負い目を感じる院生にとっては毎回苦しい思いをする試練となる。先の「精神との闘い」に加えて、研究者としての「アイデンティティとの闘い」が次に待っているのである。

しかしながら、発想を変えれば、この辛さは好機につながるきっかけとなろう。自己紹介は相手や状況によって変えるものだが、紹介したいときに説明できない部分があれば、その部分を意識的に補っていくことが研究テーマの充実につながる。大学院の授業や研究会などでも研究テーマを披露する機会はあるが、なるべく初対面の相手に、あるいは別の研究分野をもつ相手と関わる方が問題関心の空白部分に気が付きやすい。おそらく、先述した院生の孤独の問題は、この研究者としてのアイデンティティの所在のなさとも関係しているため、ただ話し相手がいればよいというのではなく、他者との関りのなかで自分の関心を紹介し、相手と共有し続けることで、孤独の色味は変わっていくのである。

3. 自分の研究とは何か？

しかし、自身の研究テーマを充実させるといっても、そう簡単なことではない。修士課程の院生だと、そもそも研究テーマとは何なのか？ どうあれば研究テーマになるのか？ どうすれば研究していることになるのか？ などなど、こうした素朴な疑問に悩まされている人

が少なくなく、大学時代の卒業論文を経てきても実はよくわからないまま持ち越されているケースがある。研究のためには「問いを立てる必要がある」と教えられるが、困ったことに、その問いをどのように見つければよいか分からないのである。自己紹介の場面で後ろめたさを感じる理由は、大抵その部分に要因がある。問題は、自分の研究テーマのどこが魅力なのかを把握するという、この第二の関門をいかに突破するかの方法の習得にある。

振り返れば、私自身も大学時代は見様見真似で、それらしき卒業論文を書き、修士課程では「〇〇の周辺を研究しています」などと不適當なことを平気で口走っていた。誰か著名な学者の研究をそれなりに勉強していれば様になるとでも思っていたのである。最近はどうか知らないが、厄介なことに、当時はこんな感じの院生が自分だけでなく周囲にも普通にいたおかげで、しばらくは、みんな揃って停滞していたんだと思う。

だが、知り合う相手が仲良し連中（院生）の外側に広がっていくにつれて、そうした態度も徐々に通用しなくなり、ある時、薄っぺらな自分の体裁が一瞬で崩れ去ったことを今でも鮮明に覚えている。その時の感覚はたしかに崩壊そのものであったのだが、興味深いことに、それと同時に覚えたのは、それまで自分を拘束していたような何かから自身が解放されるような感覚であった。

当時、社会学徒として研究を始めた筆者のなかには、「社会学の研究とはこういうものである」という、研究の対象、アプローチ、分析方法が一体となった確固たる像が存在していた。したがって、大学院生の自分の研究もその理想の像に一步でも近づけるように努力することが肝心だと考えていた。現在でも、その認識自体はそう大きく間違っていると思わない。しかし、修士課程の院生にとって、それはとてつもなく無謀な試みのように思えて仕方がなかった印象がある。

経験豊富な研究者たちによる数々の業績を前にして、圧倒的な力の差を感じて、とても太刀打ちできる感じがしなかったのである。それでも大学院にいる限りは、進む方向はそれしかないように思えて、ひたすら優れた研究（とされる成果）を勉強するだけの日々が続いた。

修士課程時代の筆者のおぼろげながらの問題関心は、〈危機の時代における人間の理性の可能性〉であった。その問題を考えるために、1990年代にすでに日本でも広く読まれるようになっていたドイツの社会学者ユルゲン・ハーバーマスの提起した「コミュニケーション的理性」について学ぶことを研究の軸とした。当時も別にハーバーマスに心酔していたわけではなかったが、彼の社会理論でどこまで行けるか、救済の可能性がどれだけあるのかを確かめたかったのである。浅はかにも、ハーバーマスの理論でダメなら危機の時代は脱せない

だろうと決め込んで、彼の仕事を自分の研究対象にしようとしたのである。

だが、それは非常に苦しい作業であった。ハーバーマスの理論は彼の問題関心から構築されたものであって、筆者の問題関心から生まれたものではないことが大きな理由である。そのことに何となく気が付きつつも、うまく言語化できず、よって明確に認識することもできず、それでもハーバーマスの理論を「勉強」するしか途はないように思われ、完全に囚われていたのである。自己紹介の場面ではすっかり「ハーバーマスを研究（勉強）してます」としか言えなくなっていた苦しい自分が常にいた。仮にハーバーマスでなくても、別の誰かの仕事についての研究になっていたであろう。けれども、それはやはり自分の研究でなく、別の人の研究である。自分の「問い」らしきものは、彼の問いに触発されてそれに被せただけであり、自分の問いではなく他人の問いでしかなかったのだ。

4. どうあれば学術研究になるのか？

「わかった。で、君の問題関心はどこにあるの？」——筆者の研究は、ある自己紹介の中で自身の偽装された構えが直接暴露されたところから実質的に始まったといってもよい。初対面の相手から投げかけられたこの一言によって、筆者はハーバーマス研究の「呪縛」（自分で進んで囚われていただけなのだが）から解かれ、ようやく自分の問いとやらを探し始めることになったのだ。もちろん、そもそもの発端は、問いというものが自分でよく分かっていなかったからこそ、ハーバーマスに依存することになっていた節もある。

ゆえに、いざ内発的に問いを生み出そうとしても、容易には足を踏み出せないでいた。たとえ「これならどうだ」と思える研究のアイデアをひらめいたとしても、すぐに、どこかの誰かによって同じことがすでに研究されているのではないか、そうであるに違いないという懸念で覆われてしまい身動きが取れなくなっていたのである。どこまでいっても、何がしかの研究テーマはすでに誰かの手中にあり手遅れであるという挫折感と、よって着手されていないテーマなどこの世に存在しないという閉塞感。自分が研究できる余地などこの世界に存在しないのにどうやって研究をすればよいのか...といった不安感。

若気の至りと言えればそれまでだが、当時は未熟なりにも真剣に悩んでいたのである。三隅先生をはじめ大学院で知り合った先生方や先輩たちからは、その都度に回避のためのアドバイスを頂いていたと思うが、ほとんど耳に入っていなかったと思う。先生や先輩はできるのだろうけど、自分にはできる気がしなかったからだ。悶々とした日々を送るなかで、研究テーマや問いをめぐって迷走するところからさらに、社会学という学問の意義も見失いか

けていることに気がついた。

学術研究における問いというものは、その専門分野の認識枠組みを背景にして立てられるものであるから、社会学も合わせて分からなくなるのは当然の成り行きであろう。むしろ、それまでの自分が社会学のことを分かったつもりになっていたに過ぎないのである。そうになると、自身の研究テーマを定める以前に、社会学における研究とはいかなるものか？社会学的な問いを見つけるとはどういうことか？などの疑問をクリアしないといけないし、何か手ごたえのようなものを掴まなくてはならない。

社会学といっても守備範囲はとても広いので、連字符社会学を網羅するのでなくて、社会学の核心（存在意義）に迫らないと自分の研究も何もないとの思いから、修士課程での社会学の学び直しが始まった——学部時代も、一応は社会学専攻であったのだ。

ただでさえ社会学とは何かを説明するのは難しいところがあるが、幸いにも、学際的な大学院は一つの学問領域をもう一度相対化して理解するには好都合の場所であった。たとえば、社会の中のある出来事に対しても、専門分野によって発想や切り口、捉え方や考察の仕方が異なるため、その違いを認識することを通じて、社会学のモットーや輪郭を捉えやすかったのである。ともすると、社会学のアイデンティティは霧のように頭の中から消え失せてしまうが、何度も「原点」に立ち返ることで、何とか忘れずに済むことができる。

社会学を使って自然に呼吸ができるようになってくると、自身の研究テーマを探ることがそこまで苦しくなくなり、いつしか自分の中にあったテーマ探しの悩みの元凶まで見えるようになっていた。その元凶とは、研究に向き合う際の構え方に関して、勝手な思い込みを自分でしていたことに由来する。筆者の場合はとりわけ、学術研究をめざす院生の姿勢を、最前線の舞台に上がるべくレギュラー争いをする「勝負」のように捉えていたことにあった。

たしかに研究にはどこか孤軍奮闘して力をつけていくイメージがあるが、学術研究は試合でもないし決闘でもない。研究上のライバルと対決したり勝負したりするのでもない。たとえ共同研究でなくとも、研究は一人ですべてを背負って闘いに臨むようなものではないのだ。学術研究では、類似の課題やテーマをめぐる蓄積されてきた先行研究を踏まえる必要があるが、それは先行研究を打ち負かすためではなく、先行研究の延長線上で研究のレベルをさらに引き上げるためにある。

当時は、それが分かっていなかったが、大学院生として研究活動に従事するということは、その研究領域の土俵に上がり、同じ土俵にいる他の研究者らとともに研究自体を前進させることが期待されている。その土俵において、自分は何ができるのか、どのような貢献がで

きるのか、それを考え実践していくことが、学術研究における自身の役割となるのだ。例えるなら、消火のために水の入ったバケツリレーに自分も加わることに、あるいはサグラダファミリア（スペイン）のような途方もない建造計画の一部に人知れず貢献すること、と云えば伝わるだろうか。研究では、自分が一人で「消火」するわけでも、「建造」していくわけでもない。このことが理解できるようになったとき、先に示した挫折感や閉塞感、そして不安感などを覚えることが次第になくなっていく。

5. 独創的な研究を求めて

要約すれば、学術研究とは、その研究領域という土俵に上がり、他の研究者らとバトンを受け渡しながら成果を積み上げていくことになる。それゆえ、初心者マークの大学院生はその土俵の広がりや性質、その土俵で研鑽を積んできた数多の先人や先輩たちの功績について、まずは真摯に学ばなくてはならない。

これは、いわゆる先行研究の学び方にかかわる指摘になるが、研究活動のなかでは当たり前のように見えて、実はこの基本が疎かになっている院生が本当に多いというのが筆者の経験である（筆者自身のかつての姿を含めて）。理由はいくつか考えられるが、やはり自分で研究をしているという自覚が本人にあるからか、先行研究を踏まえる意義をあまり理解できていないことに尽きるだろう。

仮に、あなた自身の問題関心が社会学にかかわる場合、そこでの問いが社会学的であるためには、他者からみても世界の、そして社会における問いでなければならないが、「土俵」についての学びを軽視すると、往々にして研究という名の自分語り（本人の感想）に終始してしまい、いくら自分で頑張っているつもりでも、残念ながら研究上の貢献には殆どつながっていかないので、注意である。

土俵に上がれば、そこで求められるのは、あなた自身はどういう貢献ができるのかである。大学院生や研究者といっても、それぞれセンスや関心が異なり、得手不得手の違いもあり、経験や力量の差もある。したがって、みなが同じ貢献をする必要はなく、自分にできる貢献の中身を見極めればよい。その貢献度が単純に大きい小さいかはさして重要ではなく、むしろ、自らの貢献がその研究の土俵においてどういう意義をもつのかを自分自身でしっかり識別できているかどうかの方が大切である。

筆者の見解では、研究者はオールラウンドプレイヤーというよりも、その筋の職人という像に近い。広く浅く何でも出来るのは、もちろん何も出来ないよりはましだが、突出して

何かに秀でていることの方が研究の世界では重宝される——なので、かどうかは分からないが「人」として疑問に感じる研究者は意外に多く、そのせいで院生は立場的によく悩まされる。それはさておき、例えば、社会学における社会調査には色んな調査の種類や手法が存在し、調査の専門家と呼ばれる人たちは実際には何かしらの調査方法の職人のように見なされている。その場合、調査者は自分がどの調査に興味関心があるかだけでなく、自分の資質、見識、技能がどの調査において最も有効で役に立つのかという他者の視点から見極め、力を磨いてきていることにも注目したい。

つまり、研究領域という「土俵」の世界を自分のものにし、そこで活躍してきた先人たちの仕事をマネできるようになると、今度はその土俵の上で自身が貢献できる役割を見つけて技を磨いていく。大学院の修士課程から博士課程までの間に、院生が指針とすべきことは以上のようにまとめられる。

見方によっては難題なのだが、自身が上がるべき「土俵」は一つでないので心配することはない。事前にリミットを設けずに隣接分野を含めて視野を広げ、研究会や学会などで発表することで、自分の力をもって活躍できそうな「土俵」を探ればよいのである。失敗はうんざりだが、努力の上での経験なら自身の見極めにつながる。その意味では、自己紹介に始まり研究に専念していくなかで、自分の持ち味を自分で知ることがいかに重要かを分かっていただけであろう。

最後に、あなたが大学院を修了して研究者を目指す場合に、頭の隅に残しておいてほしいメッセージをお伝えしたい。それは、研究者として生きていくうえで、可能な限り「誰かの二番煎じ」に終わらないように常に意識しておくということである。

筆者の院生時代を振り返れば、「研究者は人と同じことをしてもダメだよね」が口癖の教員もいれば、三隅先生のように多くを語らずとも自らの研究実践をもって独創性の何たるかを教育してくれる方もいた。院生だった当時の筆者にとって幸運だったのは、いずれの教員も年齢に関係なく精神的に若く、仕事においてギラギラした目で突っ走っていたことであつた。そういう時代だったのかもしれないが、癖の強い面々を前に「この人たちには、どこまでいっても敵わないな」という思いが、筆者の中で挫折感から、やがてリスペクトに変わり、「研究の世界で第一線をはる研究者って、こんな感じなのか」という将来像をもらえたことは大きな財産である。

研究の世界に長くいると、研究者による成果といっても、実際には二番煎じどころか、手垢だらけの「業績」の方が多くことに気がつく。そこには、研究課題のレベルの底上げに自

分がどういう貢献ができ前進させるかよりも、自身の業績数や引用数の方が優先されているような現実もある。研究業績の積み重ねは必要であるが、それだけに目を奪われてしまうと、研究における独創性は失われ、同じ作業や内容を繰り返していくことになっていく。

学術研究における独創性とは、なにも革新的な貢献ばかりがそれに当たるわけではない。まだ研究成果として形になっていなくとも、調査や分析の段階で見落としている点はないか。考察のなかで可視化できなかったメカニズムが他にあるのではないか。別の理論や方法でアプローチすると何が見えるのか。忘れられている概念はないか。隣接する学問分野のなかに比較できそうな研究課題はないか、など。それらを問うことが独創性でもある。独創性とは、無から有を生み出すことではなく、すでに存在する思考の枠組みに対して貪欲に、かつ批判的に反省し続けることからもたらされるのだ。

ただし、これは述べるべきか迷うところだが、それを学術研究から離れた社会生活にまで持ち込んでしまうと、いろいろと厄介なことになる。研究者とはいえ、社会生活をおくる一人の人間である。独創性を追い求めることは、素朴な共感や安易な同意とは一線を画すため、社会生活でも同じ姿勢で実践してしまうと「人」としてはかなり面倒臭く、人間関係を壊しかねない始末になる。

あなたがもし研究者を志し、学術研究の独創性を追い求めてくれるなら、筆者は陰ながらあなたを応援したいが、あなたは自分の社会生活も疎かにしてはいけない。研究活動と社会生活を間違った形で混同せずにおくことが、あなたの人生にとって大事なことになると考えている。

その意味では、惜しくも退官された三隅一人先生は、このバランス感覚に優れた数少ない研究者の一人でもあった。それゆえ、先生のその域に自分が到達するのはどこまでいっても難しいなと思わせてくれる人間でもあった。本気で尊敬できる人が自分のそばにいることは、若い頃はとくに、人間としても研究を目指す人としても幸せなことである。このエッセイを読んだあなたにとっても、心から尊敬できる人を見つけられることを願っている。